

岩崎京子「かさこじぞう」と瀬田貞二「かさじぞう」 —テキスト比較表からわかる文学作品としての特徴の違いについて—

原 田 留 美

新潟青陵大学看護福祉心理学部福祉心理学科

Two Versions of "Kasa-jizo", by Kyoko Iwasaki and by Teiji Seta
A Text-Comparison Chart Showing the Differences between These Two Literary Works

Rumi Harada

NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY DEPARTMENT OF SOCIAL WELFARE AND PSYCHOLOGY

キーワード

再話、小学校国語科、幼児教育、笠地蔵

Key words

retold stories, Japanese language education in elementary school, preschool education, Kasa-jizo

I はじめに

小学校国語科の教科書には、複数の出版社において採用されている作品がいくつか見られる。岩崎京子の「かさこじぞう」もその一つである。平成23年度版でも、東京書籍、三省堂、教育出版、学校図書が採用している。この作品は昭和42年にポプラ社から出版された絵本（絵は新井五郎）が元になっているが、教科書掲載に当たってはテキストに修正が加えられている。現行四社のテキストを見合わせるに、表記法や文節区切りの有無など細かな点では異同があるものの、ほぼ同じものとなっている。

ところで、「かさこじぞう」の絵本は岩崎京子によるものの外にも多く出版されており、とくに瀬田貞二・文、赤羽末吉・絵の福音館書店版「かさじぞう」は初版が昭和41年、岩崎版同様のロングセラーである。またこの絵本は、保育者養成校向け「領域 言葉」

の教科書でも推奨されることが多い¹⁾。このことから、幼稚園や保育所では岩崎の「かさこじぞう」よりも瀬田の「かさじぞう」の方がより一般的であると推測される。

両者は同じ昔話の再話ではあるが、ストーリー展開はほぼ同じものの、描写の力点の置き方や表現の方法等にかかなりの違いがある。幼児教育の場では瀬田の「かさじぞう」の方がより親しまれている一方で、小学校の教材としては岩崎による再話が定着したことにはそれなりの理由があろう。本稿は、以上の問題について考える基礎資料として両者のテキスト比較表を作成し、それぞれの特徴を探るためにまず、文学作品としての傾向の違いを明らかにすることを目的とする。なお、先に述べたように岩崎作品は、絵本と教科書掲載作品とは違いがあるが、本稿では教科書掲載作品を分析対象とすることとする。

比較表作成に用いたのは次の二作品である。

「かさじぞう」：福音館書店発行。以後、瀬田版と呼ぶ。

「かさこじぞう」：東京書籍版。絵本同様な文節区切りになっており、比較する上での視覚的違和感が少ないと判断したため、この版を採用した。以後、岩崎版と呼ぶ。

また、分析の便宜のため、表においては以下の五場面に区切った。

第一場面 物語の冒頭から、おじいさんが笠を売るために家をでるまでの場面。

第二場面 おじいさんの、市での笠売りの様子の場面。

第三場面 市からの帰り道、地蔵に笠をかぶせる場面。

第四場面 おじいさんの帰宅後、老夫婦が床につくまでの場面。

第五場面 笠のお礼に米などが届けられる場面。

さらに、各々のテキストの特徴を示すと考えられる箇所は、太字で示した。

なお、瀬田版、ならびに、岩崎版の原典は絵本である。また、各社教科書にはいずれも挿絵が掲載されている。（教科書に掲載された「かさこじぞう」の挿絵画家ならびに挿絵は各社異なっている。）本来ならば絵も含めての作品分析を行う必要があるが、紙幅の関係上、今回は文章分析のみにとどめることとする。

II テキストの比較表

かさこじぞう	かさじぞう
<p>(第一場面)</p> <p>むかしむかし、あるところに、じいさまとばあさまが ありましたと。</p> <p>たいそう びんぼうで、その 日 その 日を やっと くらして おりました。</p> <p>ある 年の 大みそか、じいさまは た めいきを ついて いいました。</p> <p>「ああ、その へんまで お正月さんが ござらっしゃると いうに、もちこの よういも できんのう。」</p> <p>「ほんにのう。」</p> <p>「何ぞ、売る もんでも あれば ええが のう。」</p> <p>じいさまは、ざしきを見回したけど、 何にも ありません。</p> <p>「ほんに、何にも ありゃせん のう。」</p> <p>ばあさまは、土間の 方を見ました。すると、夏の 間に かりとっておいた、 すが つんで ありました。</p> <p>「じいさま じいさま、かさこ こさえて、 町さ 売りに 行ったら、もちこ 買え</p>	<p>(第一場面)</p> <p>むかし、あるところに、びんぼうな じいさんと ばあさんと あったと。</p> <p>じいさんは、まいにち あみがさを こしらえては、まちに いって、それを うって、くらしていたと。あるとし、おおみそかが きたので、じいさんは、</p> <p>「ばあさん、ばあさん。きょうは、おれ、かさを 五つも こしらえたから、まちへ いって、しょうがつの もち かってくる。ことしこさ、いいとしをとるべな」というと、ばあさんも、</p> <p>「はい、はい。じゃ、ひいたいて まってるから」といって、じいさんが でかけて いったと。</p>

んかのう。」

「おお おお、それが ええ、そう しょう。」

そこで、じいさまと ばあさまは、土間に 下り、ざんざら すげを そろえました。そして、せっせと すげがさを あみしました。

かさが 五つ できると、じいさまは、それをしょって、

「かえりには、もちこ 買って くるで。にんじん ごんぼも しょって くるでのう。」

と 言うて、出かけました。

(第二場面)

町には 大年の市が 立って いて、正月買もんの人で 大にぎわいでした。うすや、きねを 売る 店も あれば、山から まつを 切って きて、売って いる 人も います。

「ええ、まつは いらんか。おかざりのまつは いらんか。」

じいさまも、声を はり上げました。

「ええ、かさや かさやあ。かさこは いらんか。」

けれども、だれも ふりむいて くれません。しかたなく、じいさまは かえることに しました。

「年こしの 日に、かさこなんか 買うもんは おらんのじゃろ。ああ、もちこも もたんで かえれば、ばあさまは がっかりするじゃろうのう。」

(第三場面)

いつのまにか、日も くれかけました。じいさまは、とんぼり とんぼり 町を出て、村の 外れの 野っ原まで 来ました。

風が 出て きて、ひどい ふぶきになりました。

(第二場面)

さて、まちへ きて、じいさんは、

「かさや かさや。かさは いらぬか」

こういつて、かみちょうから しもちょうへ、しもちょうから かみちょうへ、いくどもあるいた。けれども、だれひとりかうものがない。にぎやかな としこしいちでは、さかなや こめは とぶようにうれても、じいさんの かさなんか、みむきもされなかったと。

(第三場面)

そのうちに ひがくれて、ゆきが もかもか ふってきたので、じいさんは しかたなく、かさを せおって、もどってきた。とちゅうの ひろい のはらに さしかかった ころには とうとう ふぶきになった。のはらには、いしの じぞうさまたちが、

ふと かおを 上げると、道ばたに じぞうさまが 六人 立って いました。

おどろは なし、木の かげも なし、ふきっさらしの 野っ原なもんで、じぞうさまは かたがわだけ 雪に うもれて いるのでした。

「おお、お気のどくにな。さぞ つめたかろのう。」

じいさまは、じぞうさまの おつむの 雪を かきおとしました。

「こっちの じぞうさまは、ほおべたに しみを こさえて。それから、この じぞうさまは、どうじゃ。はなから つららを 下げて ござらっしゃる。」

じいさまは、ぬれて つめたい じぞうさまの、かたやら せなやらを なでました。

「そうじゃ。この かさこを かぶってくだされ。」

じいさまは、売りものの かさを じぞうさまに かぶせると、風で とばぬよう、しっかり あごの ところで むすんで あげました。

ところが、じぞうさまの 数は 六人、かさこは 五つ。どうしても 足りません。

「おらので わりいが、こらえて くだされ。」

じいさまは、じぶんの つぎはぎの 手ぬぐいを とると、いちばん しまいの じぞうさまに かぶせました。

「これで ええ、これで ええ。」

そこで、やっと あんしんして、うちにかえりました。

(第四場面)

「ばあさま ばあさま、今 かえった。」

「おお おお、じいさまかい、さぞ つめたかったろうの。かさこは 売れたのかね。」

「それが さっぱり 売れんでのう。」

じいさまは、とちゅうまで 来ると、じぞうさまが 雪に うもれて いた 話を

たっているばかり。みれば ふぶきに さらされて、かおから つららを たらして ならんでいたの、

「あやあ、むごいことだない。はだかで ゆき かぶって さぞ さむかろう」と、じいさんは、うりもののかさを、じゅんじゅんに、じぞうさまに かぶせると、六にんの じぞうさまなので ひとつたりない。そこで、さいごの じぞうさまには、じぶんの かぶっていた かさを ぬいでかぶせて、そのまま うちへ かえったと。

(第四場面)

うちでは、ばあさんが、もちを かって くるだろうと まっていたが、じいさんは じぶんの かさまで なくして、まっしろ になって かえってきた。そして、じいさんが、かさは うれなくて、六じぞうさまに かぶせてきたと、すっかり はなしを

して、
 「それで おら、かさこ かぶせて きた。」
 と 言いました。
 すると、ばあさまは いやな かお ひ
 とつ しないで、
 「おお、それは ええ ことを しなすつ
 た。じぞうさまも、この 雪じゃ さぞ
 つめたかろうもん。さあ さあ じいさま、
 いろりに 来て 当たってください。」
 じいさまは、いろりの 上に かぶさる
 ように して、ひえた からだを あたた
 めました。
 「やれ やれ、とうとう もちこなしの
 年こしだ。そんなら ひとつ、もちつき
 のまねごとでも しようかのう。」
 じいさまは そう 言って、
 米の もちこ
 ひとつす ばったら
 と、いろりの ふちを たたきました。
 すると、ばあさまも ほほと わらって、
 あわの もちこ
 ひとつす ばったら
 と、あいどりの まねを しました。
 それから 二人は、つけな かみ かみ、
 おゆを のんで 休みました。

(第五場面)

すると 真夜中ごろ、雪の 中を、
 じよいやさ じよいやさ
 と、そりを 引く かけ声が してきまし
 た。
 「ばあさま、いまごろ だれじゃろ。長じ
 ゃどんの わかいしゅが 正月買いもんを
 しのこして、今ごろ 引いて きたんじゃ
 ろうか。」
 ところが、そりを 引く かけ声は、長
 じゃどんの やしきの 方には 行かず、
 こっちに 近づいて きました。
 耳を すまして 聞いてみると、
 六人の じぞうさ

すると、
 「そうか、そうか。かさを もってきたっ
 て、こんやの たしには ならないもの。
 おじぞうさまに あげて よかったな。そ
 だらば、つけものででも としを とるべ」
 と、ばあさんが 言って、ふたりして、す
 っぽりめしを さくさく たべて ねてし
 まったと。

(第五場面)

すると、しょうがつの あさの あげが
 たに、どこかで、
 「よういさ、よういさ、よういさな」
 と、そりひきの こえがする。じいさんと、
 ばあさんは めを さまして、がんじつの
 あさに、そりひきをするのは ふしぎだな、
 と おもって きいていると、
 「よういさ、よういさ、よういさな」
 と、かけごえは だんだん、うちのほうへ
 ちかよってくる。
 はてな、そりひきは、おらうちの ほう
 へ、きたようだと、おきてみる と、かけ
 ごえが もっと おおきくなって、

<p>かさこ にとって かぶせた じさまの うち は どこだ ばさまの うち は どこだ と、歌って いるのです。 そして、じいさまの うちの 前で 止 まると、何やら おもい ものを、 ずっさん ずっさん と、下ろして いきました。 じいさまと ばあさまが おきていって、 雨戸を くと、かさこを かぶった じぞうさまと、手ぬぐいを かぶった じ ぞうさまが、 じょいやさ じょいやさ と、空ぞりを ひいて、かえって いく ところでした。 のき下には、米の もち、あわの もち の たわらが、おいて ありました。 その ほかに、みそだる、にんじん ごんぼや だいこんの かます、おかざり の まつなどが ありました。 じいさまと ばあさまは、よい お正月 を むかえる ことが できましたと。</p>	<p>「よういさ、よういさ、よういさな。 六だいじぞうさ かさにとって かぶせた じいあ うち は どこだ、ばああ うち は どこだ。よういさ、よういさ、よういさな」 と、きこえてくる。 じいさんは、おもわず、 「おお、ここだ、ここだ」と、こえをかけ て、がらりと あまどを あけてみた。 すると、そこらじゅうは あかるく か がやいて、六にんのあみがさを かぶった ひとたちが、 「よういさ、よういさ、どっこいしょ」と、 なにやら おもい たわらを のきばたに おろして、のっこのこと かえっていっ たと。 じいさんと ばあさんが、たわらをみた れば、しょうがつの もちやら さかなや ら、いえに かざる たからやら、こがね やらが、どっさり つもって、かぞえきれ ないくらい あったのだった。 それから ふたりは、しあわせになった とき。 どっとはらい。</p>
---	---

Ⅲ テキストの比較分析

本節では、上記の比較表から読み取れる各テキストの特徴について場面毎にまとめる。

第一場面

・「笠売り」仕事の位置づけと困窮の状況について

瀬田版では、笠売りはじいさんの生業であり、大晦日の笠売りも普段の生活の続きであることになっている。これに対して岩崎版は、年越しのために取り組んだ、生業とは別の仕事ということになっている。瀬田版にも「ことしこさ、いいとしをとるべな」とあり、老夫婦にとって年越しが毎年の課題であること、すなわち貧しい暮らしであることが

読み取れるが、年越しのために特別な仕事をしなければならない岩崎版の方が、困窮の状況をより強く印象づけるものとなっている。

・登場人物等の描き方

この場面に限らず全般的に岩崎版はせりふが多い。また、ことの経過を細かに描写している。年越しの方策としての笠作りに思い至るまでの場面でも、具体的な動作仕草の描写を通して老夫婦の困惑が説明されている。登場人物についての情報量が多く、心情や人となり印象に残りやすいと言える。対して瀬田版は会話が少ない。地の文にも人物の心情等をうかがわせるものは少なく、ことの経過についても言葉を尽くして説明するところはない。ゆえに人物の心情や人となりよりス

トリー展開の方に注目しやすいと言える。

第二場面

・市の様子

岩崎版には、市にいろいろな出店があること、つまり市全体の描写がある。大晦日の市の賑わいを具体的に伝えようとする表現と言える。一方瀬田版は、魚や米は売れていくが、じいさんの笠は売れなかった事実焦点を当てて伝える表現になっている。

・笠が売れなかったことについての心情描写

岩崎版は、笠が売れなかったことに対する落胆と、家で待っているばあさまの期待に応えられなかった残念さをせりふで具体的に表現し、じいさまのばあさまへの思いや人となり理解できるものとなっている。一方この点については、瀬田版には直接的言及はない。

第三場面

・市から家に帰るまでの描写について

瀬田版は、日没になったこと、雪が降り出したこと、「しかたなく」帰ること、野原で吹雪に遭うこと、地蔵からつららが下がっていたのを見かけて「むごい」と思ったこと、地蔵を思いやり笠をかぶせたことが事実として語られていく。一方岩崎版は、笠が売れないまま帰るじいさまの心情がうかがえる描写「とんぼりとんぼり」を織り込んだり、雪まみれの六地蔵を気の毒に思う心情が伝わる仕草（頭の雪を払い背に触れる。笠の紐をしっかりと結ぶ。）の描写が見える。また、そのような心情を直裁に述べるせりふが多い。このほか、岩崎版では物語の舞台の様子、じいさまが帰っていった道筋や六地蔵の立つ野原の状況（吹きさらしであること）についての説明がある。

第四場面

・帰宅後の老夫婦の様子

瀬田版では、ばあさんがじいさんを待っていたこと、じいさんが雪まみれになって帰ってきたこと、じいさんがばあさんに今日の出

来事を語ったこと、ばあさんがじいさんの行動を支持・肯定したこと、簡素な食事をして寝たことが、事実として語られていく。岩崎版では、じいさまの話聞いたばあさまが「いやなかおひとつしないで」受け入れ、はやく火にあたるようじいさまに勧めたとあり、ばあさまのじいさまへの思いが表現されている。また、火にかがみ込むじいさまの姿の描写により、帰路が身体的に辛いものであったことも理解される。さらには思うに任せなかった正月準備の残念さを振り払うために、老夫婦が餅つきの歌と身振り、即ち想像力とユーモアをもって乗り越えたことが語られる。老夫婦の人となり描かれていると言える。

第五場面

・老夫婦に贈り物が届けられる場面の描き方

贈り物が届けられた時間帯について、岩崎版では真夜中となっている。そのため、長者のところの若い衆がまだ正月準備をしているのかと老夫婦が思いを巡らすことになるが、この下りが入ることで、老夫婦が所属する共同体の存在が読み手に意識されやすくなっている。他方瀬田版では、明け方のこととなっており、長者やそこで働く者についての言及はない。老夫婦が生活する共同体を読者が意識することはない。

また、贈り物の中身やその届けられ方についても違いがある。岩崎版では、お返しの贈り物をとどけたのは地蔵であることが明示されており、お返しの中身はその時老夫婦が必要としていた年越しができる範囲のものにとどまっている。地蔵に親切にしたので、現時点で必要なもののお返しが地蔵からもたらされた。それ以上の広がりはない。これに対して瀬田版には、贈り物の届け主について「六にんの あみがさを かぶった ひとたち」と曖昧に表現している。「のっこのっこ」という擬態語には地蔵的などころがあるが、彼らが地蔵であることの明示はなく、不可思議

な印象を与えるものとなっている。さらに贈り物の中身も、当座必要な物資だけではなく、こがねも含まれている。「それから ふたりは、しあわせになったとき。」はそのことを受けての結末表現であり、豊かな年越しが叶ったのみならず、老夫婦の人生が様変わりし「めでたしめでたし」となったこと、即ち善なる者にはどこからか救いの手が延べられ、良い報いがあるという昔話らしい終わり方となっている。

・贈り物を届けに来た者たちの歌への反応

岩崎版、瀬田版ともに贈り物を届けに来た者たちは歌で老夫婦に呼びかけている。これに対し瀬田版は歌に応じているが、岩崎版は応じていない。岩崎版の原作である絵本の「かさこじぞう」では応じているので、これは教科書掲載の際に改訂されたのであろう。

誰が何のために自分を呼ぶのかはわからないものの呼ばれているのでとりあえず応えるという反応は、素朴で、昔話の登場人物らしさを感じさせる。それに対して岩崎版での反応は、正体のしれない呼びかけに応えることをためらう用心深さを読み手に印象づける。老夫婦の人となり伝える反応と言っても良いだろう。もしくは、歌に応じることで結果的に善行の見返りを求めているかのように見えてしまうことを避けたものか。いずれにしても、次節で触れる所謂昔話らしさとは異質の、人物の造り方であると考えられる。

IV まとめ

昔話の特徴の一つに、人物像の類型化がある²⁾。例えば、善人悪人は明確に区別されている。そして、善人か悪人かは、心情の詳しい描写ではなく、予めのラベリング（正直じいさん、欲深じいさん等）とそのラベルに合致した行動・行為によって示される。善人は善人と呼ばれて善人らしく行動し、悪人は悪人と呼ばれて悪人らしく行動するのである。瀬田

版の老夫婦は、上のような昔話らしさにそって造型されていると言えるだろう。

岩崎版「かさこじぞう」の老夫婦も、心優しい善人である。生活の貧しさに対する悩みはあっても、心優しい善人ゆえの心の葛藤などは抱え込まない。その点ではぶれがない。

けれども、夫婦相互の思いやりやいたわり、雪にまみれた地蔵への憐憫の情などの描写が細やかで筆も多く割かれている。表にして瀬田版「かさこじぞう」と比較してみると、老夫婦の心情や人となりが強くと意識された再話作品であることがテキストからわかる。このことに関連し、岩崎京子は絵本の後書きに次のように書いている。

老夫婦が心をよせあい、信頼し合う姿には、ほのぼのと胸があたたまるようです。

わたしは、〈清福〉ということばは、このふたりの姿だと思いました。じいさまとばあさまは、地蔵様にお正月じたくをいろいろもらいますが、そのたまものにまさるしあわせを、もっていたのだということ、よみとってほしいと思います。

ここには、人の幸せはモノに依拠するのではなく、心の有り様そのものの中にあるという考えが読み取れる。このような人生観は、貧しくとも善良なる者は善行故に最終的に貧しさから救済され、悪い者は悪行ゆえに報いを受けるといふ、昔話によく見られる単純な論理とは異なるものであろう。岩崎はすでに絵本執筆の段階から、登場人物を類型化して語るいわゆる昔話の一般的なあり方からの逸脱を意識して再話を行っていたのではないかと考える。

以上、2種の「笠地蔵」再話作品の特徴について見てきたが、岩崎版について言うならば、上のような作品的特徴が、「かさこじぞう」が教材として広く採用されるようになったことと関わっているのではないか。この点を確認するために、教科書出版会社各社がHPで公開している指導計画案を参照してみた

い。例えば、学校図書の「年間指導計画・評価計画作成資料」では、「かさこじぞう」の学習目標に「登場人物の言動から心や人柄をつかむことができる。」、学習活動に「場面ごとに大事な言葉を書き抜きながら、まわりの様子やじいさまとばあさまの言動を読み取り、二人の心や人柄について考える。」とある。この指導計画では、配当時間15時間のうち、「読む能力」に12時間があてられている³⁾。また、東京書籍の「年間指導計画」の「教材のねらいと主な学習活動」には、「昔話独特の言い回しに着目したり、叙述からじいさまやばあさまの人柄を想像したりしながら、「かさこじぞう」を読む。」とある。この指導計画では配当時間 16時間のうち14時間を「読む能力」に、さらに14時間のうち6時間が上記の学習活動にあてられている⁴⁾。三省堂の「年間学習指導・評価計画作成資料」の「学習目標主な学習活動」には「「じいさま」と「ばあさま」の行動や様子の叙述に基づいて、二人の気持ちや人柄を話し合う。」とあり、配当時間の8時間すべてが「読む能力」にあてられている⁵⁾。

いずれも、老夫婦の心情（気持ち）だけでなく、人柄にまで踏み込んで理解することがねらいとなっている点が目を引く。人柄という語が使われている以上、単なる類型的人物造型を超えたものがこの作品にはあると理解されているということになるだろう。言い方を変えるのならば、「かさこじぞう」は人柄にまで踏み込んで理解する学習の教材としてふさわしい作品と受け止められ、教科書に配置されているということになるのではないか。

一方、このような特徴を持つ岩崎版「かさこじぞう」を昔話の教材として用いることに対する疑問も福田隆義によって提示されている⁶⁾。福田の岩崎版に対する評価を簡単にまとめると、昔話の再話にしては心情描写や状況の叙述に細かいところが多く、説明的で所謂

昔話的魅力に欠けるというものになる。さらに福田は、昔話を取りあげるのなら、昔話らしい作品を扱うべきではないかという考えに基づき、瀬田版「かさじぞう」をよりすぐれた教材として挙げている。

確かに、福田の言うとおり、昔話らしさを味わわせることをねらいとするなら、瀬田版の方が教材としてよりふさわしいと言えるだろう。また、シンプルな人物造型と描写により昔話らしい再話作品となっているが故に、瀬田版は、心情や人柄に踏み込んで理解することを子どもに求めないことを前提とする保育者養成あるいは幼児教育の場において、子ども達になじみやすい作品として評価されてきたものとも考える。

同じ昔話が元になっていたとしても、再話の姿勢（昔話らしい再話を目指すか、登場人物の内面を掘り下げるか）によって作品傾向は大きく異なる。昔話らしい簡素な語り口を味わわせることをねらいとするならば、瀬田作品の方がよりふさわしいであろうし、昔話という低学年にもなじみやすい枠組みを利用しつつ人物について深く読み込むことをねらいとするならば、あるいは、児童向け読み物やその先の小説への道筋をつけていくことを意識するのならば、岩崎版の方が教材としては扱いやすいだろう。

瀬田の「かさじぞう」が幼児教育の場で広く親しまれてきたと考えられるのに対し、岩崎による「かさこじぞう」の方が小学校国語科教材として定着した理由の一つには、上記のような文学作品としての傾向の違いがあると考えるものである。

注

- 1) 管見に入った限りではあるが、巻末等の幼児に読み聞かせしたい絵本リストに「笠地蔵」が入っているものでは、すべて瀬田版を紹介して

- いる。
- 2) 稲田浩二, 稲田和子. 日本昔話ハンドブック. 208-213. 東京:三省堂;2002.
 - 3) 学校図書. 平成23年度用年間指導計画・評価計画作成資料(一太郎). <http://www.gakuto.co.jp/junkokugo/down/23syo-koku_nenkei-hyouka2jtd>. 2011年11月30日.
 - 4) 東京書籍. 平成23年度版小学校国語科「新しい国語」指導計画作成資料. <<http://ten.tokyo-shoseki.co.jp/downloadfr1/jtd/ekc84521.jtd>>. 2011年11月30日.
 - 5) 三省堂. 平成23年度版『小学生の国語』年間指導・評価計画作成資料[案]. <http://tb.sanseido.co.jp/kokugo/kokugo/e-kokugo/23_plan-data/index.html>. 2011年11月30日.
- なお、教育出版社がHPで公開している「年間学習指導計画・評価計画案」では、「評価」欄に「場面の様子や登場人物の気持ちを想像しながら工夫して読んでいます。」とあるのみで、老夫婦の人柄の理解については言及がない。これは、同社の計画案が配当時間が6時間とコンパクトであるのに加え、具体的な学習活動も「『かさじぞう』を読み、好きなところをメモして紹介し合う。／朗読テープを聞くなどして、民話の語り口に関心をもつ。」が計1時間、「全文を読み、おもしろかったところ、気づいたことを話し合う。」が3時間。「おもしろかったところを、役割を決めて読み合う。」が1時間。「その他の昔話を、お互いに紹介し合う。」が1時間となり、他社の計画案のような、登場人物について深く読み込むことをねらいに含むものとはなっていないためであろう。このような学習活動であるのならば岩崎版でなければならない理由は薄まり、瀬田版も教材として用いるのではないかと考える。教育出版社. 平成23年度版年間指導計画・評価計画案. <<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/view.rbz?nd=133&ik=1&pnp=100&pnp=106&pnp=133&cd=2016>>. 2011年11月30日.
- 6) 福田隆義. 民話の教材化:絵物語としての

『かさじぞう』. 文学と教育. 1988;145:28-37. 福田隆義. 文学史の中の児童文学『かさじぞう』. 文学と教育. 1983;123:64-70.

文献一覧

- 岩崎京子, 新井五郎. かさじぞう. 東京:ポプラ社;1981.
- 瀬田貞二, 赤羽末吉. かさじぞう. 東京:福音館書店;2002.
- 新しい国語二下. 東京:東京書籍;2011
- ひろがることば小学国語2上. 東京:教育出版;2011.
- 小学生のこくご2年下. 東京:三省堂;2011.
- みんなとまなぶしょうがっこうこくご2下. 東京:学校図書;2011
- 木村はるみ. 乳幼児のことばを育てる. 東京:雲母書房;2005.
- 高橋司. 乳幼児のことばの世界. 京都:宮帯出版社;2007.
- 阿部明子. 保育内容一言葉一. 東京:建帛社;2005.
- 千葉恭造, 田上貞一郎, 佐藤秀一. 領域・言葉の理論と実践. 東京:双文社出版;1993.
- 清水美千子. 絵本の世界(1). 東京:明治図書;1984.
- 高橋省己. 言葉一理論編一. 東京:三晃書房;1991.
- 岩田英作, 岩崎京子. 「かさじぞう」のたくらみ. 鳥根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要. 2011;49:11-16.